

渋沢敬三 日銀総裁・大蔵大臣時代のお土産

当館は、明治の実業家として著名な渋沢栄一の嫡孫で、日銀総裁や戦後の大蔵大臣を歴任し、日本の民俗学・民族学を発展させた人物としても有名な渋沢敬三によるコレクション資料「日本実業史博物館準備室旧蔵資料」を所蔵している。

昭和六年（一九三一）十一月十一日に渋沢栄一が死去した後、現在の北区飛鳥山公園内に「渋沢青淵翁記念実業博物館」（青淵は栄一の雅号）の建設を決議した。

そこで敬三は、「折角お爺さんの為に財界の人達が御考え下さっていることは大変有難いことであるが、それならばそれを敷衍した経済史的な博物館を、渋沢家も御手伝してつくりたい」として、「渋沢青淵翁記念室」「近世経済史展観室」「肖像室」からなる「青淵翁記念日本実業博物館」（近世経済史博物館、のち実博）構想を提唱した。収集にあたって、「一見つまらぬ様な事でも、ありのまゝに出来得る限り集めて置かねばならぬ」というポリシーで遺されたコレクションである。敬三氏が描こうとした栄一の実像



図1 旧紙幣見本帖 (37TGH-0345~0347)



図2 日本紙幣屑 (37TGH-1090)

に少しでも迫り得る資料群ともいえる。

昭和十四年（一九三九）五月十三日の渋沢栄一誕生百年記念祭には地鎮祭が挙行されたが、戦争による社会の激変により竣工には至らなかった。その後も「日本実業史博物館」の名称で資料の収集および展示・収蔵のための施設設置場所の模索が続けられたが、実現には至らなかった。まさに「幻の博物館」となってしまった。

日本実業史博物館構想が断念された後、その準備室が収集したさまざまな資料は、昭和二十六年（一九五一）に文部省史料館（旧・国文学研究資料館史料館の前身）に一括寄託され、後に寄贈となり現在に至っている。

宮沢喜一氏の回顧録によると、日銀総裁時代の敬三氏は、「人は好みが仕事はできないみたいなことを世間で言われるが、人が悪い方がいいでしょう」と挨拶をした、という（『宮沢喜一「回顧録」岩波書店、二〇〇五年）。図1は、一九四三年四月五月に中国北部を旅行した時、「満洲旅行中、奉天並ニ吉林、満洲中央銀行ヨリ送ラル」、（封筒印刷）「満洲中央銀行奉天分行紙、満洲旧紙幣見本並様本」を手にして、自筆で封筒表書に「経済史博物館保管之事」（赤鉛筆）と記した資料である。

図2は、元々は古印が入れられていた桐の小箱に、「日本紙幣屑」と記して紙幣屑を採集して（拾って？）博物館資料としたと推測される資料である。いずれもどの時期か、またその意図も汲み取たいが、官業の人として生きたことの証でもある。

また、大蔵大臣の時、文部省の予算が少なく「こんな予算で学問しろというのは、これじゃ国家が、学者に学問するな、というのに等しい」として、一つ一つ自分で精査して復活させたという（『渋沢敬三先生景仰録』東洋大学、一九六五年）。科学研究費補助金の基礎を作り、研究者への大きなお土産を遺してくれた。

これらの資料は、当館のホームページより、日本実業史博物館コレクションデータベースとして、絵画・器物・広告・文書・書籍の資料情報六九三六件と一万三六四三件の画像が公開されている。ぜひクリックして、「物」の語りを感じていただきたい。

（青木睦）